

法政大学

『スーパーグローバル大学創成支援』事業に採択された法政大学の『課題解決先進国日本からサステナブル社会を構想するグローバル大学の創成』。外国人留学生の受け入れ年間3000人、英語による学位取得コース設置などユニークかつ明確な取り組みについてご紹介します。



法政大学の考える“グローバルな人材”とはどのような人のことでしょうか？



英語をはじめとする外国語が縦横無尽に話せて、日本以外の国の方々と渡り合いながら仕事ができる、その能力を備えた人を一般的には“グローバルな人材”という場合が多いと思います。なかなか海外に出ない、日本人の内向きな国民性。このままでは日本の企業が海外市場の中で生きていけない。そのために育成したい人材を“グローバル”と言っているのではな

いでしょうか。

しかし私たちの考えるグローバルは、外国で仕事ができるという力だけにとどまりません。もっと広い視点でグローバルの意味を考えています。そもそも“グローバル”という言葉は、“グローブ”から派生したものです。グローブとは地球という意味があります。地球には国境や赤道など、線なんて引かれていないですよ。そんな地球上で国境を越えてさまざまな活動ができる人、それを“グローバルな人材”であると考えています。それはビジネスに限らず、教育やNPO、ボランティアなど多様な活動の領域を含みます。

もちろん高い語学力を身につけていることは望ましい。しかし、大切なのは英語のテストで高い点数を出すことではなく、自分が伝えたいと思うアイデアをもって、それを何とかして伝えようとするパッションがあること。それがグローバルな人材に欠かせない力です。人間としての熱意や意欲を伝えられる人をめざす教育を展開していきたいと考えています。

そのグローバルな人材という視点と、SGU 構想にある“課題解決先進国”は、どのような関係があるのですか？

自然災害や社会問題など、これまで日本はさまざまな課題と向き合い、その問題を解決してきました。そのノウハウを同じような課題にぶつかっている各国へと伝えていこうとしています。国が抱える課題を解決することは、その国の人々がこの世界で生き抜いていく力につながります。例えば水道の蛇口をひねれば水が出るという、日本では当たり前に行えることでも、地球上すべての国・地域において達成されていることではありません。必要なときにすぐ水が出る、それを実現することが難しい条件にある国もある中で、どうやって問題を解決していくのか。これまで日本が経験してきたことを伝えることで、課題解決の糸口を見つけていきたいのです。それには伝える力を備えたグローバル人材の存在が不可欠となります。

2011年に起こった東日本大震災では、私たちがこれまで当たり前に行っていたことができなくなるという経験もしました。どうやって震災という大きな問題を乗り越えてきたのか、このときの経験はまた別の機会に役に立つはずですが、課題にぶつかりながらも、人々がどうやって生き抜いてきたのか、そのことをしっかり次世代や諸外国に伝えていくべきだと考えています。

グローバルな人材を育成するため、 大学ではどのようなプログラムや環境を整えているのでしょうか？

これまで国際舞台で活躍する人材を育成するために行われてきたグローバル人材育成プログラムを、より多くの学生が受講できるように発展させます。

従来は学生の海外体験といえば日本人学生が海外留学をすることで得られるものでした。しかし今後は、本学から海外へ行くだけでなくさまざまな国から留学生を迎え、法政大学のキャンパスに居ながら留学生との交流を通して海外体験できる環境作りに取り組んでいきます。海外からの留学生は、人数が少なければ“お客様”的な扱いで一部の日本人学生が彼らのケアをするような場面が中心になります。その留学生の数が多くなれば、学内にはさまざまな国籍の学生が混在し、多様な言語が飛び交うようになるでしょう。法政大学のキャンパスで、地球の縮図のような体験ができるのです。

もちろん海外への留学プログラムもすべての学部学科で提供し、学生が英語力や目的に応じて選べるよう、多様なプログラムが用意されています。語学力が高い学生のためのアメリカをはじめとする大学で現地の学生と一緒に英語で授業が受けられる派遣留学制度、3～4カ月間ホームステイなどを行いながら外国語を学び異文化体験ができるSAプログラムなど、自分にふさわしい留学制度を選べるのです。提携大学も世界各地に150校ほどあり、学生自身が行きたい国、大学を選べるというのも魅力だと思います。今後10年間で提携大学を250校に増やしていくという構想もあり、選択肢がますます広がっていきます。

法政大学では今後学生のグローバル体験100%を目指してカリキュラムを展開していきます。グローブ（地球）で暮らす人として、学内にいても学外へ出てもオープンマインドでどんな人とも対話ができること、そしてお互いの間に問題があっても、決別することなく問題のありかを話し合っ解決法を一緒に考えていく、そんな強さを持つこと、それもこれらのプログラムを経験することによって身につけられるはずです。

また、これまで英語のみで展開される授業は多数存在していましたが、今後はその科目数をさらに増やし、入学から卒業まで英語で行われる授業のみの履修で卒業できるコースを2016年秋に開設する予定です。

では、サステイナブル（持続可能）社会とグローバルの関わりについてはどのようにお考えですか？

持続可能な社会、というと、自然科学や環境の分野を思い浮かべる人が多いかもしれませんが、私はさまざまな学問分野が互いに影響しあう必要があると考えています。現在の日本の課題である、原発の問題を例にとると、原発そのものについての学問である化学や科学に加え、原発に関わる人の福祉や心理、社会や経済などが複雑に絡みあっていることが理解できますよね。多様な考え方の人が集まる国際社会において、自分と発想の違う人と共に生き、価値観の多様性をどう理解していくのかも重要な課題となります。

サステイナブルな社会というものは、平和でなければ成り立ちません。そして平和であるには人々が文化の多様性や考え方の違いを認めあう必要があります。学生のうちに多様な社会にふれ、相手を認め共生していくための知恵をつけてほしいと考えています。

授業のスタイルとして、アクティブラーニングも取り入れていくのでしょうか？

自分で問題を見つけて、その問題を解決するために何ができるのか自分の頭で考えること。それが本来大学で行うべき学問です。マニュアルのない世界でも学べる力を大学で身につけてほしいと思っています。

教員と学生、学生同士が活発に意見を交わしあう主体的な学修をより実施しやすくするためのアクティブラーニング施設も整備しています。ディスカッションのしやすい教室として、可動式の机や椅子を取り入れるなど、教員と学生が自由なスタイルで意見を言い合える環境作りに取り組んでいます。本来の大学の在り方を改めて突き詰めていくことで、アクティブラーニングのための学習環境を充実させていきます。高校までの決まった答えを導き出す勉強ではなく、数値化されないものをディスカッションする力を持つこと。ディスカッションやディベートによって多様な考えの論理的側面に触れること。その経験を重ねることで、違いを知り、認めるという思考が育つのではないのでしょうか。

どんな志向をもった学生に適した学びかただとお考えですか？

どんなことでも面白がることのできる人、でしょうか。

高校までの教室で行われてきた、出された問題を解くテクニックを学ぶ勉強を終えて、自分で面白いと感じることができるテーマを見つけること。それが大学での学問のスタートです。大学は自分の興味・関心に合わせて学ぶ場所です。所属学部で展開される研究だけに留まらない好奇心で、さまざまな話題や学問に触れてみて、自ら課題を発見する。そして自分が見つけた問題を面白がることできれば、研究も楽しく進められるはずです。

法政大学は東京の中心にある大学です。この立地は学外で行われているイベントや施設、情報にもアクセスしやすい環境といえます。ぜひ自分で設定した課題を追究し、多様な文化や思考に触れて本当

の意味でのグローバルな人となってください。

インタビューに答えてくれた方



■佐藤良一先生
法政大学経済学部教授
常務理事、評議員

東京都立上野高等学校出身。早稲田大学政治経済学部卒業後、神戸大学大学院経済学研究科修士課程修了、同大学院経済学研究科博士課程単位取得退学。富山大学経営短期大学部、経済学部（1979年4月より1996年3月まで）を経て、1996年法政大学経済学部教授（現在に至る）。2009年経済学部長（2011年3月まで）、2009年学校法人法政大学評議員（2011年3月まで）等歴任。2014年4月より現職。